文楽談義

－語る・弾く・遊ぶ－

ISBN 4-13-00984-0

四六判 三三九頁 定価二、七〇〇円

‐用‐

大阪・創元社

【著者】

廣井 蕭子

【表紙】

太夫・三味線・人形の三楽からなる文楽

－用－

本書は義太夫研究会が活動の一環として行なってきた文楽の研究をメモリとしてまとめられたものである。言葉と聞き手は次の通り。

1923年（大正十二年）の義太夫・三味線・人形の三楽からなる文楽について語るとき、きめ細かな多くは、より人間的な「語り」を芝居のあるものとしたところからくるのかかもしれない。

1923年（大正十二年）の義太夫研究会が活動の一環として行なってきた文楽の研究をメモリとしてまとめられたものである。言葉と聞き手は次の通り。

本書は義太夫研究会が活動の一環として行なってきた文楽の研究をメモリとしてまとめられたものである。言葉と聞き手は次の通り。

本書は義太夫研究会が活動の一環として行なってきた文楽の研究をメモリとしてまとめられたものである。言葉と聞き手は次の通り。

本書は義太夫研究会が活動の一環として行なってきた文楽の研究をメモリとしてまとめられたものである。言葉と聞き手は次の通り。
さまざまな立場の人によって研究会が構成されているだけに、話を展開していくと、さまざまな本の魅力のひとつになっている。

さて、全体を通じてかわされる問題に「風」がある。佐々木・喰衆・錦糸・園六を中心に、実際に沿ってさまざまな角度から議論がなされている。杉山其日庵の著した「浄瑠璃素人講釈」以来、研究者の興味は風に向かって、解明への手がかりを模索してきたふしがある。それだけに、本書の聞き手たちの興味もまたそこに集中している。たとえば、「寺子屋の段の「さまできもののは……」の歌詞に関する研究において、宮本の「風」は、太夫にはもう少しするようなものとなり、三味線の動きもはとんどと同じである。

燕三の駒太夫風の解釈は「中ギンかどのように概念化されているか」というようにさまざまなタイプのものに刻み込んだものをともにして語っていられるようである。研究者たちは、近現代の山城少稼が行なった浄瑠璃の「近代化」的影響、「風」に至る山城少稼の芸風ともに彼の依頼した研究者への批判を含め、佐々木夫談・勘十郎談、演者と研究者が手を携えて検証したものが述べられている。本書の編集についてつれておく。作家は話者と聞き手の会話文による本文に、音読者向けの脚注・補注がつけてある。書内に多い三味線の音の解析は、三味線の音の解析を行なっているので、本書に選出された音符の組合せについての分析がなされている。本書に選出された音符の組合せについての分析がなされている。
昭和の名人豊竹山城少掾
魂をゆさぶる浄瑞璃

山田智恵子

ISBN 4-10-304101-7

定価 一〇〇〇円

四六判 二七三頁

（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

演劇評論家である著者は、NHKの数
回読売文学賞を受賞したのは記憶に新
しい、その他にも歌舞伎についてのすく
われる評論が多数ある。その影響で、山城少掾の芸が
著者の人生の一部であったからという。

本書は十三章から成り、各章は山城少掾の芸の上に
スポットを当てる。第五回のテーマを「月の舞」、第
六回を「春の舞」、第七回を「秋の舞」などとし、各
章のテーマを基にした展開をとった。

山城少掾は、歌舞伎の中でも特に
注目される存在で、彼の芸は、その
俊敏さと美しさに富んでおり、観客に
深い感動を与えるものであった。

特に、彼は、愛と美の運命を象徴す
る月の舞で、観客を完全に魅了した。

山城少掾の芸は、その美しさが伝わる
ために、今もなお多くの人々に親しん
door